

韓国濟州島の別棟型民家の成立に関する予察的研究

佐々木史郎

- I. 問題の所在と本研究の目的・方法
- II. 既存研究における別棟型民家の採録地
- III. 別棟型民家における厨房配置の諸形式
 - (1) 厨房を配置する建物の種類
 - (2) 厨房棟と主屋の位置関係
- IV. 別棟型民家における主屋の間取り
 - (1) 濟州島民家の建物規模と間取り
 - (2) 2間型主屋の別棟型民家
 - (3) 3間型主屋の別棟型民家
 - (4) 4間型主屋の別棟型民家
- V. 別棟型民家成立の時期と動機
 - (1) 別棟型民家の成立時期
 - (2) 厨房分離の動機
- VI. むすび

I. 問題の所在と本研究の目的・方法

居住棟と炊事棟を別にする住居様式は東南アジアやオセアニアに広くみられるほか、日本でも南西諸島から九州・本州の南岸にかけて、その存在が確認されており、日本民家の源流や文化系統をさぐるうえで、重要な存在と考えられている¹⁾。韓国では1970年代以降、全羅南道南海岸の南方約90kmに位置する濟州島において、類似の様式の存在が知られるようになり、張(1984)は、そのような民家を別棟型民家とよんだ²⁾。

濟州島における別棟型民家の存在を示す最も初期の文献としては、藤島(1925)による濟州島建築の探訪記に収録された貴族邸宅の間取り図³⁾があげられる(図1)。その図には、主屋の

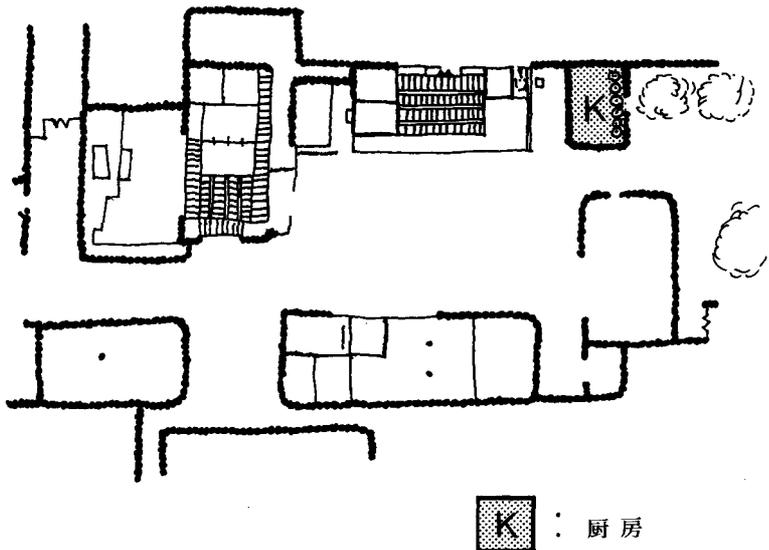


図1 1920年代に採録された濟州島別棟型民家の間取り(濟州高翊柱氏宅資料)藤島(1925)原図を簡略化。

末端の土間部分には炊事用のかまどが見えず、その隣に別棟になった厨房が描かれている。ただし、本文ではそのことに関する説明はまったくなされていない。第二次世界大戦前に済州島民家の調査を行った研究としては、ほかに善生(1929)⁴⁾、桝田(1939)⁵⁾、泉(1966)⁶⁾などがあるが、この別棟型民家に言及したものはない。同大戦後の文献では、金正基・金鴻植(1973)による済州島建築の調査報告書の中に、主屋の厨房を納屋に改造し、別棟に厨房を設けた間取り図が掲載されているが⁷⁾、その図についての説明はなされていない。

済州島の別棟型民家について具体的な報告を行ったのは、おそらく張(1974)が最初であろう⁸⁾。その後、呉(1974)⁹⁾、金鴻植(1978, 1985)¹⁰⁾¹¹⁾、曹(1983)¹²⁾、金光彦(1988)¹³⁾らがこの形式の民家に言及し、張(1984, 1985)¹⁴⁾¹⁵⁾も再論を試みるなど、調査事例はまだ少ないものの、この別棟型民家の存在が研究者の間で認識されるようになった。日本でも野村(1984)¹⁶⁾が、済州島におけるこの民家の形成について言及している。

上記の諸研究では、済州島における別棟型民家の間取り例の紹介のほか、その形成の経緯について、いくつかの見方が提示されている。その内容を整理すると、比較的新しい時期に主屋と厨房の分離が進んだとする見方と、済州島でかつて多数みられた古俗であるとの見方に大別することができる。

前者の見方におけるおもな論点としては、厨房機能の縮小と部屋の増設(張, 1974)¹⁷⁾、1930年代の新生活運動の影響(金鴻植, 1978)¹⁸⁾、上流住宅の様式の波及(金鴻植, 1985)¹⁹⁾などがあげられる。一方、後者の見方では、主屋内への厨房の発生と別棟型民家の衰微傾向(張, 1984)²⁰⁾、東南アジアや日本の南西諸島の様式に通ずる南方文化との関連性(張, 1974・1984; 呉, 1974; 金光彦, 1988)²¹⁾などが想定されている。

これらは日韓の居住文化の系統や源流にかかわる議論ともからんで、重要な問題を含んでい

る。しかし、ほとんどが個別の発言や推測にとどまり、基本的な理解が研究者の間で十分共有されてこなかった。

本稿では、現地調査を含めた今後の具体的な検討作業に先立ち、既存の文献資料をもとに、済州島の別棟型民家の形態的特徴を整理するとともに、入手した間取り図の対比から類推できる範囲で、別棟型・非別棟型の形成順序や形成の動機に関する上記の各論点の妥当性を検討しておきたい。

分析に使用した主な文献は、藤島(1925)、金正基・金鴻植(1973, 1974)²²⁾、張(1974)、呉(1974)、金鴻植(1978, 1985)、曹(1983)、金光彦(1988)、若林(1988)²³⁾、ハウジング・スタディ・グループ(1990)²⁴⁾らの諸研究である。とくに数量的な分析を行うときは、金鴻植(1978)による南済州郡表善面城邑一里および北済州郡翰林邑東明里南門洞・明月里下洞の調査報告書²⁵⁾に掲載された図を使用した。

間取り図上での別棟型・非別棟型の別は、主屋とみなされる建物の内に厨房があるかないかで判断した。なお、家人の起居室をもつ建物が同一宅地内に何棟か描かれている場合は、主人夫婦の寝室となる「ククドゥル」(大房の意)とよばれるオンドル房が表示されている棟を主屋とみなした。

済州島の民家では、しばしば床房(サンバン)とよばれる板床または土床の居間が屋内生活の中心の場として重用される。韓国民家の伝統的な床暖房機構であるオンドルの部屋は、済州島にも導入されているが、本土に比べてその地位は低い。しかし、家屋規模によってはこの床房を欠く場合もある一方、主屋だけでなく、副屋にも床房が設けられることも少なくない。そこで、主屋・副屋の識別指標としては、使用上の序列が明確なククドゥルをとり上げることにした。

II. 既存研究における別棟型民家の採録地

筆者が入手した済州島関係の文献の中から、民家の間取り図が収録されている地点を抽出し

たところ、済州島およびその付属島嶼において里名まで明記されているものは25カ所であった。里名不詳のものも含めると29カ所に上る。そのうち主屋と厨房が別棟になった間取りが報告されているのは、済州市、南済州郡の城山面水山里東門洞と表善面城邑一里、北済州郡の朝天面北村里、朝天面朝天里下洞、旧左面演坪里迎日洞（牛島）の6カ所（図2）である。なお、韓

国本土およびその南海岸島嶼地方では、別棟型民家の報告例はない。また、図2では除外してあるが、全羅南道の海南半島と済州島の間位置する楸子群島での調査でも、この型の民家は報告されていない²⁶⁾。

金鴻植（1985）によれば、厨房を別棟に設けるのは済州島全域でみられる一般的傾向とされているが、同時に南済州郡安德面倉川里にはほ

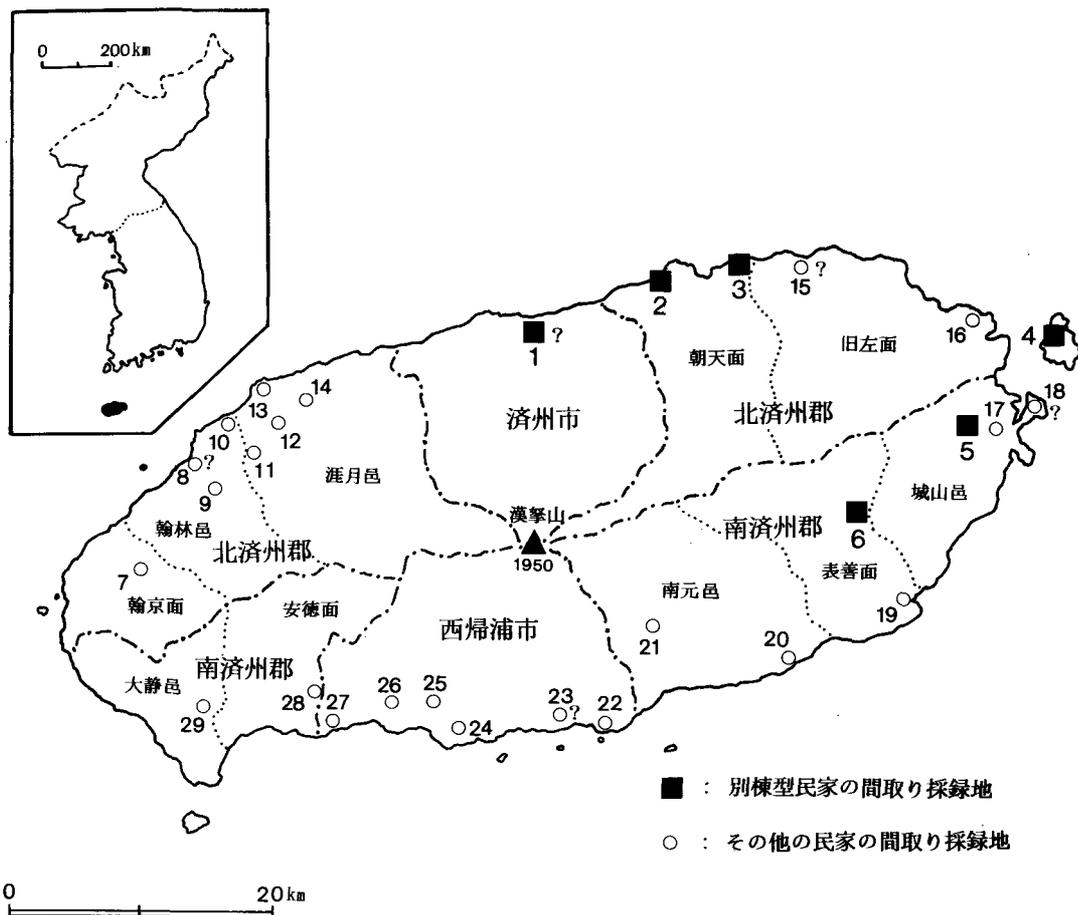


図2 既存研究における済州島民家の間取り採録地

1. 済州邑, 2. 朝天里, 3. 北村里, 4. 演坪里, 5. 水山里, 6. 城邑里, 7. 造水里, 8. 翰林邑, 9. 東明里・明月里, 10. 帰徳里, 11. 鳳城里, 12. 納邑里, 13. 涯月里, 14. 下加里, 15. 金寧里, 16. 下道里, 17. 古城里, 18. 城山浦, 19. 表善里, 20. 泰興里, 21. 新禮里, 22. 甫木里, 23. 西帰浦, 24. 江汀里, 25. 河源里, 26. 中文里, 27. 下猊里, 28. 倉川里, 29. 任城里

（1～29は採録時の地名、?印は位置不詳）

資料) 藤島 (1925) : 1, 8, 15, 18, 23; 金正基・金鴻植 (1973) : 12, 14, 16, 17, 19, 20, 22, 24, 29; 張 (1974) : 3, 4, 5, 6, 7, 13, 21, 26; 吳 (1974) : 25; 金鴻植 (1978) : 6, 9; 金鴻植 (1985) (2, 28); 若林 (1988) : 10; ハウジング・スタディ・グループ (1990) : 11, 27

とんどみられないことが指摘されており²⁷⁾、実際には地域によって、あるいは集落によって、別棟型民家の出現頻度にかかなりの差があることが示唆されている。事実、金鴻植(1978)による『民俗村指定保存対象地域調査報告書』に掲載された南済州郡表善面城邑一里101戸分と、北済州郡翰林邑東明里南門洞および明月里下洞50戸分の間取り図から集計してみると、前者では、主屋とは別の棟に厨房を設けたものが60戸みられるのに対し、後者にはそうしたものは皆無である。また、ハウジング・スタディ・グループ(1990)が報告した北済州郡涯月邑鳳城里の14棟、西帰浦市下院洞の13棟の主屋の間取りは、いずれも厨房を備えた非別棟型である。なお、これまでに報告された別棟型民家の事例は、もつばら島の東側地域にかたよっている。

III. 別棟型民家における厨房配置の諸形式

(1) 厨房を配置する建物の種類

上記の報告例について、主屋と切り離された厨房の配置先を建物別にみると、図3のような諸形式がある。図3の(a)では厨房以外の区画をもたない炊事専用の付属建物、(b)では同一棟内に厨房以外の区画も伴った複数機能の付属建物、(c)では家人の起居するオンドル房を備えた副屋に、それぞれ厨房が配置されている。このうち、(b)において、厨房と併置される施設は、納屋と畜舎が多く、ほかに門棟と組み合わせられることもある。また、ごく少数ながら、饌房(調理や配膳の準備をする一種の賄い部屋)および庫房(穀物などを収納する納戸)という上げ床部分と組み合わせさせた例もみられる。

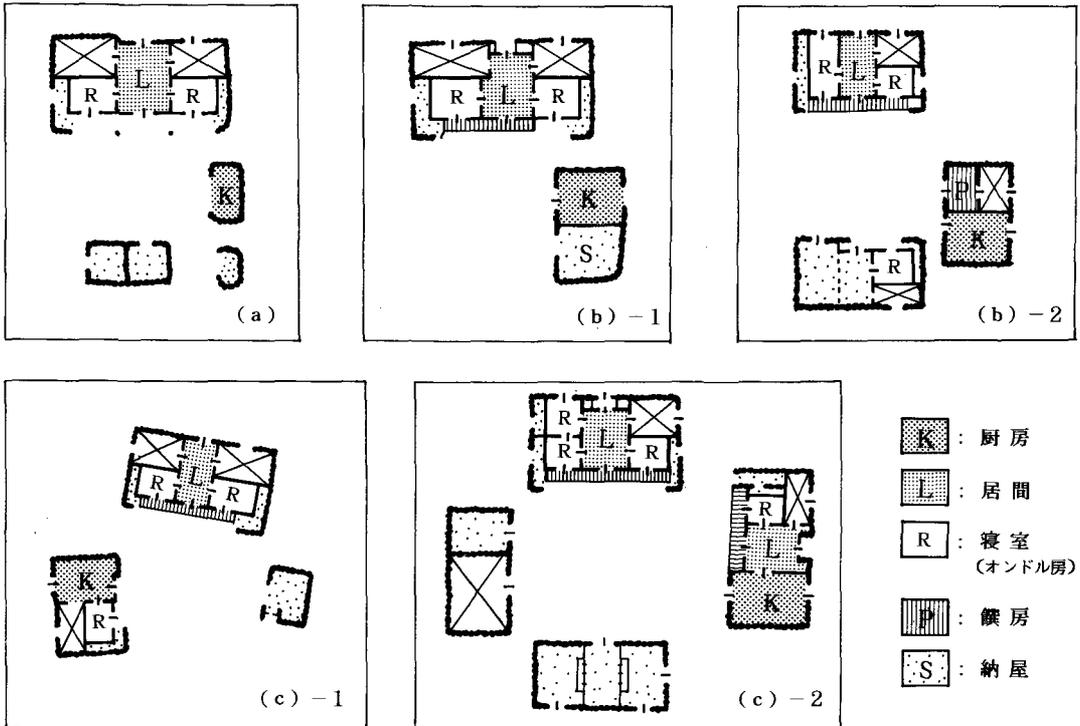


図3 建物の種類別にみた別棟型民家の厨房配置形式

- (a) : 炊事専用棟への配置例(朝天面北村里)
- (b) : 非居住用施設との併置例(表善面城邑一里)
- (c) : 居住兼用の副屋への配置例(表善面城邑一里)

資料) 金鴻植(1978)および(1985)の原図により編集・簡略化。

南濟州郡表善面城邑一里の別棟型民家60例について、(a)、(b)、(c)の内訳を求めたところ、18:25:17という数値が得られた。その際、同一宅地内で副屋と付属建物の双方に厨房がおかれている場合は、(a)または(b)とみなし、(c)は副屋にだけ厨房があるものに限定した。それは以下のような理由による。

すなわち、濟州島の伝統的な家族制度のもとでの副屋は、本土民家における「舎廊棟」(主人の書斎や接客室などを備えた棟)や「行廊棟」(使用人の部屋などを並べた長屋)のように、主屋から特定の機能空間を分化させたものとは異なり、いわば主屋と同一機能の反復という性格をもつ。本土民家では、主屋と副屋の間取りはまったく異なった構成になるのが普通であるが、濟州島の民家では、ほぼ同様の間取りをもった主屋と副屋が同一宅地内に共存する例もみられる。主屋と副屋の別は、それぞれの建物に住む家族間の関係によって決まるにすぎない。

同島では、本土でみられた大家族制の伝統とは異なり、長男であっても、結婚すれば独立した生計単位を構えるのが原則であった。その場合、同一宅地内に主屋に準ずる機能をもった副屋を別に建てて、炊事・食事・就寝・生活物資の収納などを、主屋と副屋で別個に営むようにする方式がしばしばとられてきた。したがって、建築時にそうした慣習が維持されていたとすれば、副屋と付属舎の双方に厨房があつて主屋にはない場合、主屋の家族が使用するのは付属舎の厨房と推測される。副屋の厨房は本来、別個の生計単位に属するため、主屋に住む家族との共用を前提としていないことが多い。

ところで、上記の分類の(a)については、建物内部に厨房以外の区画をもたないものとして描かれていても、建物面積が大きい場合は、その一隅を他の用途に使い分けている可能性も考えられる。したがって、(a)と(b)とを厳密に区別することにはあまり意味がない。構造的にみても、(a)と(b)は、内部に上げ床部分をもたない平土間のものが大半で、側壁も石積みだけの簡単なものが多い。起居空間をもたない付

属舎(脇屋)への厨房配置という点に着目して、(a)と(b)とを合算すると、その比率は7割に達することになる。

なお、別棟型民家が報告されている他の5地域のうち、厨房の配置先が示されていない城山面水山里東門洞の例を除くと、いずれも(a)の型として図示されている。

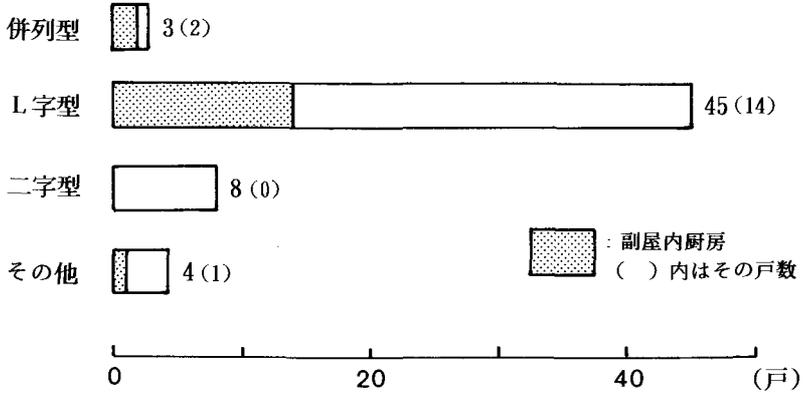
(2) 厨房棟と主屋の位置関係

次に、上記の(a)、(b)、(c)のような別棟の厨房と主屋との位置関係をみると、方形の前庭を囲繞する4辺のいずれかに配置されるのが一般的である。すなわち、厨房を含む棟は、前庭を挟んで主屋と向かい合わせに立つか(二字型配置)、主屋の右前方もしくは左前方に鍵の手に並ぶか(L字型配置)のいずれかであり、主屋の真横や後方に置かれることは、きわめてまれである。

上述の表善面城邑一里の場合でも、全60例の別棟型民家のうち、主屋の真横に厨房の建物を配置するのは3例にすぎず、そのうちの1例はごく細長い宅地に制約されて、建物を横一列に並べるほかないものである。それに対して、L字型配置は45例、二字型配置は8例であり、この2形式だけで9割近くを占める(図4)。なお、二字型の8例のうち、上掲の図3(c)に示したような副屋の厨房は皆無であるが、L字型は45例の中に副屋の厨房を14例含んでいる。

一方、別棟型・非別棟型の別を問わずに宅地内の建物配置をみても、濟州島では、主屋をはじめとする数棟の建物で方形の庭の周囲を囲繞する方式が卓越する。城邑一里では2棟がL字型をなすか、もしくは3棟以上の建物中の主要2棟がL字型配置をなし、その他の建物と合わせて全体でコ字型や逆U字型、ロ字型をなしているものが最も多い。主要2棟の二字型配置を基本にしたものは、その3分の2以下にとどまっている。ただし、主要2棟の二字型配置とL字型配置の比率は、地域によってかなり異なっており、城邑一里と同時期に調査された翰林邑の2集落では、二字型およびその変形が、L字型

(a) 主屋と炊事棟の配置形態



(b) 敷地内の建物配置

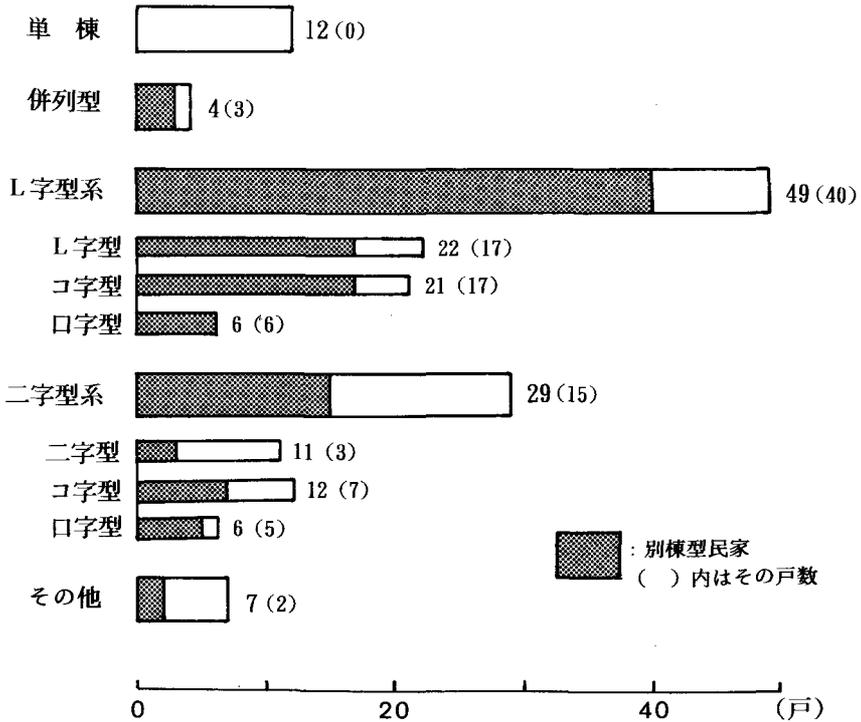


図4 主屋と厨房棟との配置形態 (上) および敷地内の建物配置形態 (下)
下図の「L字型系」と「二字型系」は、敷地内の主要2棟のなす形態により分類。
資料) 金鴻植 (1978) により算出。

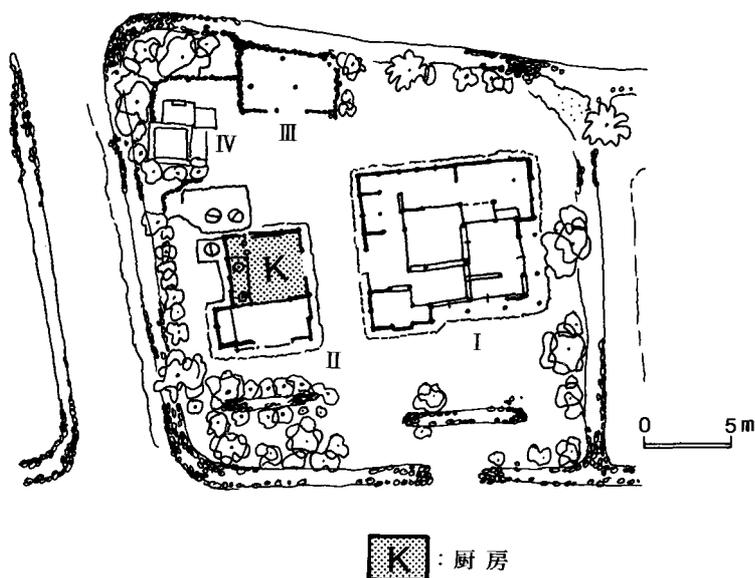


図5 日本の別棟型民家の建物配置例 (沖縄県竹富島)

I. 主屋, II. 釜屋, III. 納屋, IV. 豚舎・便所

資料) 国立民族学博物館資料を模写。

のその7倍をこえている。また張(1974)も、濟州島の建物配置が二字型を基本とすることを指摘している²⁸⁾。

ただ、L字型と二字型のいずれにしても、厨房から主屋に食物を運ぶ際の動線は、必ず前庭を横切るかたちとなる。これは、炊事棟を主屋の真横に置くことの多い日本の別棟型民家と顕著な相違を示している。

日本の別棟型民家の場合、別棟の炊事棟(釜屋)が主屋に接近して建てられ、双方を廊下でつないだり、互いに軒を接して共通の雨樋をつけたりし、ひいては屋根の小屋組だけを別にして建物の基底部分を一体化させるなどしており、そこに一連の合棟化の方向がうかがわれる²⁹⁾。それに対して、濟州島の場合は、合棟化への中間段階を示すような形態はほとんどみられない。なお、日本の南西諸島の民家では、濟州島民家のような明瞭な前庭囲繞型の建物配置をとらず、しばしば宅地の中央部に主屋と釜屋を横一列を並べ、その後方に畜舎などの付属舎を配置しており(図5)、その点でも差異がみられる。

濟州島の分散的な建物配置自体は、15世紀

末期の『東國輿地勝覽』濟州牧・宮室条の「……毎屋不相接所以備火災……」という記述にみられるように、しばしば強風地域における火災時の延焼防止との関連で説明されてきた。宅地周囲に石垣をめぐるしたり、家屋の外壁に石材を多用するのも、そうした効果があるものと考えられる。しかし、日本の南西諸島の建物配置形態との相違もそのような強風への備えという脈絡で説明できるかどうかは、今後の検討課題である。ちなみに、濟州島では、冬季に強い北西季節風に見舞われる西半部の方が、東半部に比べて、屋根の葺材を縛りとめる綱の径が太くなっているとの指摘もあるが(張, 1974)³⁰⁾、前述のように、同島の西側地域ではこれまで別棟型民家が報告されていない。

IV. 別棟型民家における主屋の間取り

(1) 濟州島民家の建物規模と間取り

別棟型民家の成立の経緯を考えるにあたっては、主屋がどのような状態の場合に厨房が分離されているかを検討しておく必要がある。

冒頭にあげた諸研究では、濟州島民家の間取

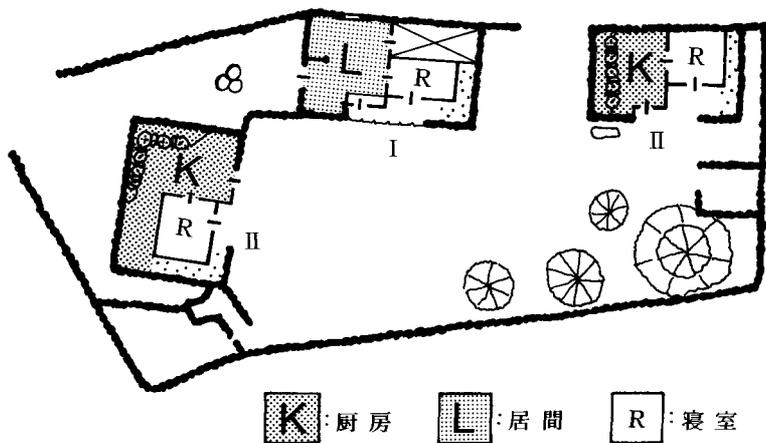


図6 2間型主屋をもつ別棟型民家の間取り例(表善面城邑一里)
I. 主屋, II. 副屋
資料) 金鴻植(1978) 原図により編集・簡略化。

りの一般的特徴として、①平入り直家(すごや)の卓越、②中央に床房(サンバン)とよばれる奥行き2間分の居間をとって、屋内生活の中心的な場とする、③寝室となるオンドル房や穀物収納用の納戸(庫房)を前後に並べた複列型の房配置を含む、④桁行を3つの区画に間仕切りした3間型間取りを基本型とする、などの点が、ほぼ一致して指摘されている。ここでは、濟州島の別棟型民家が、こうした諸特徴の中でどのように位置づけられるかを検討することにす。

まず、南濟州郡表善面城邑一里の調査報告(金鴻植, 1978)に間取り図が掲載された民家101例を規模別に分けると、2間型が7例、3間型が72例、4間型が9例、さらに店舗や学校の付属棟などの変則的間取りのものが13例で、やはり3間型の卓越が認められる。このうち、別棟型民家は2間型に1例、3間型に55例、4間型に2例がみられたほか、店舗などの特殊間取りの住宅にも3例みられた。

ここで2間型・3間型・4間型とは、桁に沿って並ぶ区画の数がそれぞれ2つ・3つ・4つのものをいう。この区画の柱間1つ分を1間(けん)と数えるが、その長さは曲尺に換算すると6~10尺程度となり³¹⁾、家屋同士でも、同一家屋内の部屋と部屋の間でも、かなりのばらつきがある。

(2) 2間型主屋の別棟型民家

2間型主屋の別棟型民家は、城邑一里では1例だけみられた。前面が居間(床房)と寝室(オンドル房)の2間に区画され、オンドル房の後ろに納戸(庫房)が置かれている(図6)。この形態に厨房が接続されると、濟州島民家の基本型とされる3間型の間取りになる。この事例民家の厨房は、厨房とオンドル房1からなる副屋にある。

この副屋の建物は、内部に間仕切りを施して寝室を確保したものとしては、最小規模の家屋である。独居老人の住居などに用いられ、「2間小屋」とよばれることがある³²⁾。濟州島で2間型家屋というと、通常はこの副屋の型か、さもなければ、この間取りの寝室の後方に庫房1を複列式に付加した型をいう。この事例民家の主屋のように、厨房の土間部分を欠いた2間型間取りの居住用家屋は、他に報告例がない。

(3) 3間型主屋の別棟型民家

上述のように、3間型の間取りは数的な卓越が著しく、張(1974)もこの型を濟州島民家の基本形とみなしている³³⁾。このうち、非別棟型の3間型間取りは、上記の厨房と寝室および納戸からなる2間型間取りが拡大し、中央部に居間

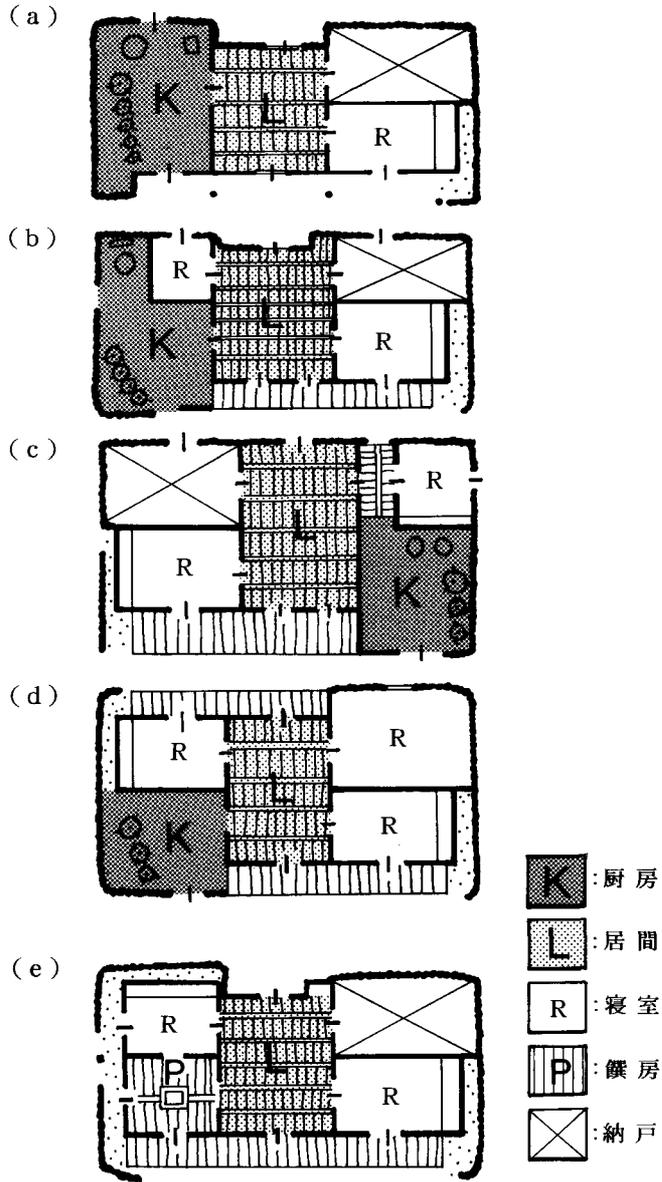


図7 3間型主屋の間取りの諸形式

(a) 表善面表善里, (b) 表善面城邑里, (c) 南元面新禮里, (d) 涯月面涯月里, (e) 城山面水山里
資料) 張 (1974) 原図により編集・簡略化。

がとり入れられたものである。これはさらに、居間と厨房の間に部屋がないもの、厨房空間の中に囲い込まれたような形で小規模の部屋（多くはチャグクドゥル=小房とよばれるオンドル房）を設けたもの、厨房の前か後ろに間仕切りを施して、1間分の部屋を確保した型などに

分けられる (図7)。

これに対して、厨房を分離させた3間型は、オンドル房の焚口周辺の空間を囲いこんだ細長い土間部分 (クルムク) を除くと、主屋全体が上げ床化されたものが9割以上を占める。その間取りはほとんどが、中央の居間と、その両側

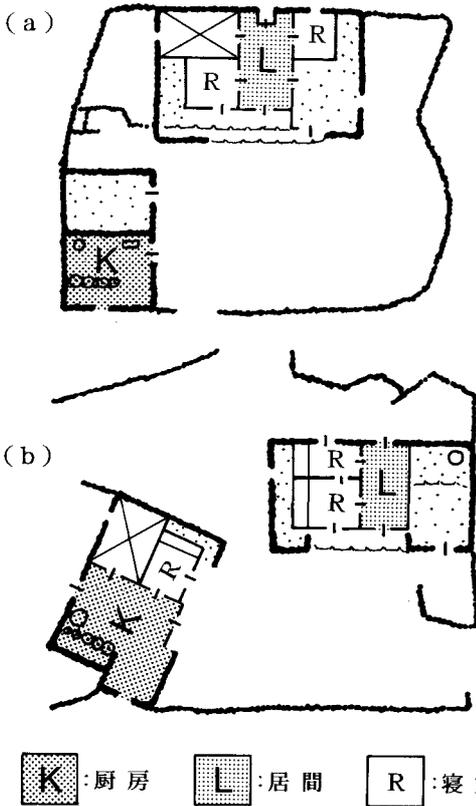


図8 3間型主屋内に土間を残した別棟型民家の間取り例(表善面城邑一里)

資料) 金鴻植(1978)原図を簡略化。

の前後2間ずつの房部分との5区画からなり、全体としておおよそ左右対称の配列を示している。居間以外の4区画の構成は、寝室2~3に納戸もしくは饌房であるが、それらをどういう順に配列するかは、家によって異なる。

なお、上に述べた上げ床とは、オンドル、板床、土を盛り上げてつき固めた土壇など、通常の土間面より高くした状態をいう。古い形態をとどめる民家では、床房を土間のままにしていることがあるが、そうしたものは数量的にみて、もはや例外とみなすことができる。また別棟型民家で床房を土間のままにした例も報告されていないので、ここでは除外した。

別棟型の3間型間取りの少数例としては、城邑一里において、主屋内の一方の端に広く土間部分を残したものが2例みられる(図8)。その

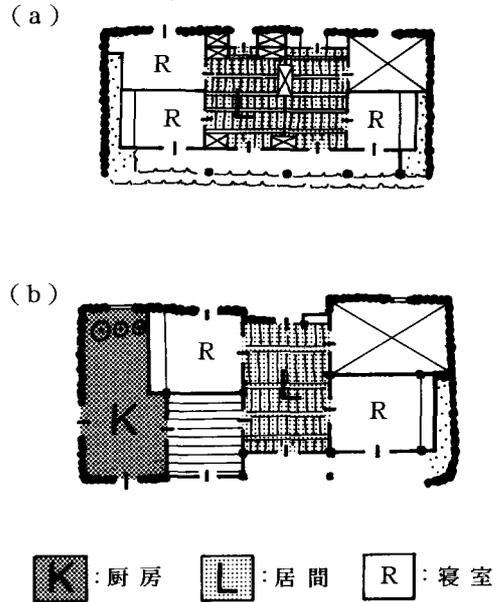


図9 4間型主屋の間取り例(表善面城邑一里)

(a) 別棟型, (b) 非別棟型

資料) (a) 金鴻植(1978)および(b) 張(1974)の原図を簡略化。

一方の例は、床房の片側にオンドル房が1間しかなく、その周囲を広く土間のままにしている。また他方は、床房の片側に梁間一杯の土間をとって、納屋空間にしている。

しかし、これらが建築当初からこの状態だったかどうかは、疑問の余地がある。すなわち、竈の有無を別にすれば、上述の非別棟型の3間型家屋と同じ形態であり、かつて厨房だったところから竈だけを撤去して別棟に移すと、この形になるからである。濟州島民家の伝統的な竈は、本土のそれとは異なって、オンドルの焚口を兼ねておらず、石を3つずつ並べて釜をのせるだけの形式なので³⁴⁾、撤去するのはごく容易である。

この2例を除くと、他の文献に示されたものも含めて、別棟型の3間型主屋でそうした土間を残したものはない。3間型以上の規模の主屋内に1部屋相当分以上の広さの土間があれば、そこは竈をならべて厨房にしているのが普通である。

(4) 4間型の別棟型民家

非別棟型の4間型間取りは、前面が厨房・寝室・居間・寝室といった順に区画されるのが普通である。それに対して、既存文献中にみられる別棟型の4間型主屋は、中央の床房が横2間幅になっている。すなわち、規模は大きくなっているが、居間を中心とした左右対称の間取りという点では、土間をもたない3間型の別棟型民家と共通する(図9)。

藤島(1925)が貴族邸宅として示した別棟型民家も、それに近い形を示す。ただしこの例は、居間の一方には部屋が1間しかなく、その前面に広い土間部分を残したままで、厨房が別棟化されている。この点は、3間型の別棟型主屋の少数例として示した形と類似する。なお、店舗などの変則的な間取りにおいても、厨房を分離させているものは土間部分を欠いている。

上でみてきたように、オンドルの焚口付近を除いて、主屋の内部がすべて上げ床化された段階で、厨房が主屋から分離するものが大半を占めるということは、別棟型の発生の経緯を考える上で、重要な意味をもつと考えられる。

V. 別棟型民家成立の時期と動機

(1) 別棟型民家の成立時期

上記のような実態をふまえた上で、濟州島における別棟型民家の成立を、その時期と動機という2点から検討することにする。しかし、これまでの調査報告の中で、各家屋の建築年代が明らかにされているものはごくわずかにすぎない。また、年代がある程度明らかなものでも、建築当初からの別棟型なのか、のちの改造で別棟化したものかは判別が困難である。したがって、議論の多くは、別棟型民家の具体的な成立時期の特定というより、非別棟型との時代的な前後関係の類推に止まらざるをえない。

冒頭にあげた既存研究のうち、別棟型民家の成立時期について具体的な年代を指摘しているのは、金鴻植(1978)³⁶⁾のみである。金は表善面城邑一里の調査報告の中で、1930年代に日本人が展開した新生活運動によって成立したものと

の見方を示した。この「新生活運動」というのは、朝鮮総督府が立案・推奨した農村更生運動もしくは農村振興運動とよばれたものをさすと思われる³⁶⁾。これは当時、絶糧や負債の悪化など、きわめて深刻な疲弊状態にあった農村の更生をめざした運動で、経済的な体質強化のほか、精神運動や衛生状態の改善など多方面にわたり、農家の戸別の指導がなされた。

しかし、濟州島の別棟型民家の成立原因を、この運動のみに帰することはできない。厨房が別棟になった間取り図を含む藤島(1925)の報告は、それ以前の状態を記録したものである。また、筆者が日本在住の濟州島出身者による郷土文化研究団体を通じて間接的に確認したところでは、少なくとも1920年代に、北濟州郡朝天面に別棟型民家が何棟か存在していた。

朝天面の別棟型民家は、金鴻植(1985)の報告にもみられるが、この地域は日本統治時代に反日的気風の強いところとして知られ³⁷⁾、当時、日本人の諸活動が円滑に行えるような状態にはなかったものと推定される。したがって、1930年代の農村振興運動の際に建てられた例が皆無だったかどうかは、なお不明であるにしても、それ以外の経緯で建てられたものが相当数あったと考えるべきであろう。金鴻植自身も、のちの著作では、この運動には一切ふれていない。

別棟型民家の成立時期に関して、金鴻植が示したもう一つの見方は、かつて富裕層の住宅でとられていた手法が、今日では広く一般の住居でも用いられるようになったというものである(金鴻植, 1985)³⁸⁾。富裕層の住宅でいつ頃からこの様式が採用されたかについては具体的に述べられていないが、一般の住宅に急速に普及したのは1970年代のこととされている。

一方、張はこの問題に関して、二通りの見方を提示している。すなわち、厨房機能の縮小に伴い、厨房内の余分な空間を利用して部屋を増設する動きが進んで、ついには厨房が主屋から分離するに至ったとする見方(張, 1974)³⁹⁾と、濟州島では時代が下るにつれて厨房を主屋内に設ける傾向が強くなり、別棟型民家は消滅しつ

つあるとする見方(張, 1984)⁴⁰⁾である。さらに、張(1985)は後者の見方に関連して、かつてはより多くの別棟型民家が、広く分布していたとする古老の談話を紹介している⁴¹⁾。

ここで張の示した後者の指摘や古老の談話が、具体的にどの時期の状態をさしているのかは判然としない。仮りに、金鴻植の指摘した1970年代を含む一連の別棟型普及期から現在までの変化を語ったものだとすると、金と張の解釈に大きな食い違いはない。すなわち、金は別棟型の普及期に至るまでの状態を述べ、張は普及期を過ぎて、また非別棟型が一般化するようになった時期のことを述べたのであれば、両者の違いは、別棟型の一連の消長の中で、着目した時代が若干前後しただけということになる。あとは、別棟型の普及期をどの程度の幅で考えたらいいかという点に議論が移る。

しかし、別棟型が濟州島民家一般の古型として、非別棟型に先行していたという意味だとすると、濟州島の別棟型民家には比較的最近の流行によるものが多いとする金の指摘とは、齟齬をきたす。また、濟州島民家の文化系統をさぐる上で、東南アジアから日本の南西諸島にかけてみられる別棟形式との類似性の吟味という問題も提起されてくる。

既存資料から類推しうる範囲で上記の論点を検討すると、まず、北濟州郡旧左面下道里の事例民家の報告に、厨房を欠いた主屋内の納屋部分に「旧厨房」と表記した図があり(金正基・金鴻植, 1973)⁴²⁾、厨房改廃の実例があったことを知ることができる。また、同郡朝天面北村里でも、本来主屋内にあった厨房を部屋に改造して、厨房は別棟に移したという事例が報告されている(張, 1974)⁴³⁾。

前述のように、濟州島の炊事用かまどは、オンドルの焚き口とは切り離されていて撤去や移動が容易なため、厨房の空間を他の用途に転用する必要が生じた時に、これらの事例と同様の改造を施すことは少なからずみられたものと思われる。それに対して、互いに近接する別棟の主屋と厨房棟の間を連結させて1棟にしたり、

主屋内でもともと厨房でなかった箇所をあらたに厨房に改造したという事例は、入手した文献中には見いだされなかった。

濟州島民家の中で最も多くの比率を占める3間型家屋についてみた場合、3間型の別棟型から非別棟型に移行する過程としては、①居間(床房)と寝室(オンドル房)からなる2間型主屋に厨房を連結する、②3間型主屋の一部を厨房に改める、③別棟型の3間型が順次老朽化して廃棄され、代わって当初から非別棟型の3間型主屋として建築する例が増える、という3通りの可能性が考えられる。

①については、前述の2間型の別棟型民家のような例が他にも相当数みられれば、厨房と合棟化される前段階として、定式化された形態が存在していたとの想定も可能であろう。しかし、現時点ではこの1例しかなく、やはり特殊例とみなさざるをえない。また、この事例の厨房棟は単間の炊事専用棟ではなく、オンドル1間を含み、小規模ながら起居空間と炊事空間を兼備した非別棟型家屋である。濟州島の2間型主屋には、これと同じ形態が多い。

日本の二棟造民家で合棟化がすすんだ場合は、厨房棟(釜屋)を取り入れた分、主屋の面積が大きくなる傾向があるが、濟州島では、2間型主屋に厨房を加えて3間型にしたという形跡は確認できない。したがって、別棟型・非別棟型間の改変があったとしても、その大半は主屋規模の変化をとみなわない、②または③の過程でしか行われなかったと推定すべきであろう。

②の場合、主屋内に1部屋相当の土間部分があれば、容易に厨房に改造できる。しかし、当初から厨房以外にそれだけの土間部分をとって主屋を建てる例がどれほどあったかは疑問である。前述の城邑一里の2つの事例にしても、当初からそのままの土間だったのか、厨房を廃したあとの土間なのかは判然としない。また、主屋全体が上げ床の部屋になっていた場合、その一部を廃して厨房に改造するということも考えにくい。さらに、1948年の4・3事件⁴⁴⁾による家屋被害が大きかったようなところでも、全面的な

建て替えに際して、あえて部屋数の減少を伴う方法を一齐に採用した可能性は少ない。一般に、家族や家財がふえて部屋の増設が必要になることはあっても、その逆に既存の部屋がまったく不要となるという事態は少ないものと考えられる⁴⁵⁾。

これらのことを考慮すると、仮に別棟型から非別棟型への移行がおこりえたとしても、既存の別棟型からの改造ではなく、新築時から非別棟型として建てる例がふえたという、③の過程が主であったとみるべきであろう。濟州島全体の趨勢として、4間型の主屋がある程度増加した形跡は認められるし、その中に3間型の別棟型主屋に厨房を付加した例が含まれる可能性はある。しかし、依然として3間型が卓越する状態が続き、その中のかんりの部分が非別棟型である以上、当初から非別棟型の建て方が相当数存在していたとみなすのが自然であろう。

北濟州郡翰林邑東門里南門洞および明月里下洞の50例の主屋の内訳をみると、4間型が22例にのぼる。しかし、最多形態はやはり3間型で28例あり、そのいずれもが、主屋内に厨房を備えた非別棟型である。少なくとも3間型に関するかぎり、前述の例のように、非別棟型の改造によって別棟型が生じたということは十分おこりえても、その逆に別棟型が母体となって広く非別棟型が生じたと考えうる根拠はごく薄い。

城邑一里の調査事例の7割を占める3間型主屋のうち、55例の別棟型民家と17例の非別棟型民家についてみても、前者が非別棟型から改造されたということにはそれなりの蓋然性が認められるが、その逆の過程をうかがわせる材料は見いだせない。ただし、調査報告に建築年代の項目がありながら、主屋の改造時期や厨房棟の建築時期はほとんど記載されていないので、厨房の改造や分離の例があったにしても、住民の記憶を越えた比較的古い時期から行われていた可能性もある。

以上のことから考えると、これまでに採録されている別棟型は、濟州島民家一般の古形というよりも、ある状況下において、非別棟型から

派生したのが多いとみるべきであろう。その過程としては、張(1974)が示したような、非別棟型民家における厨房空間の縮小と部屋の増設、さらに主屋厨房の完全な廃止と主屋全体の上げ床化という流れ⁴⁶⁾が最も妥当と思われる。ただし、その形成時期については、金鴻植(1985)の指摘した1970年代にひとつのピークを認めるにせよ、そこからある程度の幅でさか上って考える必要がある。

(2) 厨房分離の動機

主屋と厨房との分離を促したり、それを容易にさせたりする要因としては、厨房から発生する煙や熱気の忌避(張, 1974; 金鴻植, 1985)⁴⁷⁾や、部屋の増設のための厨房空間の転用(曹, 1983; 野村, 1984)⁴⁸⁾などがあげられてきた。呉(1974)⁴⁹⁾は、別棟型民家の成立そのものにはふれていないが、4・3事件(1948年)や朝鮮戦争(1950~53年)などの社会混乱期を契機に、外部からの流入人口や大家族を収容する要請から、家屋の多室化傾向が強まったことを指摘している。このほか当然ながら、家族間のプライバシーへの認識が高まった新しい生活様式の普及も、部屋の増改築を促進させる背景となったものと思われる。

従来、有効な排煙・換気機構をもたなかった濟州島の厨房が、衛生上の理由から忌避されがちだったという点については、議論の余地が少ないと思われる。そのため、ここでは、主屋内に部屋を増設する際に、厨房がその場所にあてられやすい理由を検討する。

厨房内に他の区画を設けて、厨房空間が縮小されたり、厨房全体が他に転用されるようになった背景としては、かつては各種の屋内作業の場でもあった厨房の機能が炊事のみにより単一化され、広い空間を必要としなくなってきたこと(張, 1974)⁵⁰⁾、肥料としての灰の意義が低下し、竈の背後に設けられていた灰置き場の空間が不要になったこと(呉, 1974)⁵¹⁾などがあげられている。ただし、別棟になった厨房棟の多くが、非別棟型民家の主屋厨房と同程度の面積を維持し

ているのは、別棟型民家の形成の時点で、屋内作業場などを兼ねた広い厨房空間への要請がなお続いていたとも考えられる。

筆者としては、上記の張や呉の指摘のほかに、済州島の民家では、オンドルの構造上、部屋の増設の余地が厨房内に限られる傾向が強かったという事実に着目しておきたい。周知のように、済州島の民家に導入されたオンドルは、もともと厨房のかまどから独立したものであり、燃料やその保管場所も別にすることが多かった。3間型の主屋内にオンドル房を設ける場合は、まず床房とよばれる居間をはさんで、厨房と反対側に配置し、これを上位の部屋として主人夫婦が使用する⁵²⁾。その背後には通常穀物などを収納する庫房を設ける。焚口は本土民家のように、部屋の前面の縁側の下部などに設けることはなく、オンドル房の壁と家屋の側壁との間の細い土間部分(クルムク)に設けられるのが常であった。煙坑はそこから床房の方向に伸びるが、その形状は不完全であり、送熱範囲はごく短い。

この方式では、焚口から一方に複数のオンドル房を接続させることはできない。したがって、居間の片側に日字型に配列された2部屋にさらに部屋を接続して田字型間取りに発展させることはない⁵³⁾。また、家屋の前面にL字型に部屋を突出させて曲家にすることも、きわめてまれである。

こうした建築様式のもとで、同一主屋内にオンドル房を増設するとすれば、必然的に居間(床房)をはさんだ反対側、すなわち厨房の側に置かざるをえなくなる。1部屋だけの増設であれば、厨房空間の半分をそれにあてるだけで済むが、2部屋の増設となると、クルムク部分を残して厨房空間全部を廃止する必要がでてくる。その際に、煙・熱気といった厨房の忌避的条件や部屋の増設要請の方が、厨房分離に伴う不利益よりも強く意識されれば、主屋からの厨房分離が促進される。

こうして、ある時期に非別棟型を母体として、別棟型の民家が多数生まれたものと考えられる。しかし、その後、炊事施設の近代化によって、

衛生上の忌避的条件が改善されたり、庫房・饌房・クルムクなどの諸空間の機能が薄れて、寝室などへの転用が可能になると、あえて厨房を分離する必要も薄れ、別棟型民家は衰微していったのではあるまいか。

VI. むすび

以上は、既存文献に掲載された間取り図の対比を通して、済州島の別棟型民家の特徴を整理するとともに、主として消去法的な類推によって、別棟型民家の消長過程を考察したものである。その内容の主な点は以下のとおりである。

(a) 別棟型民家における厨房は、単独の炊事棟か納屋・畜舎などと組み合わせた付属舎に設置されることが多いが、オンドルの寝室を備えた副屋の厨房を使用することもある。

(b) 厨房を備えた建物は、主屋とともに二字型またはL字型をなして前庭を囲繞する位置におかれており、主屋の真横や後方にくることはほとんどない。また、主屋に近接したり、庇や通路で結ばれることもなく、概して主屋からの独立性が高い。これらは日本の二棟造民家にみられる釜屋の配置方式とは異なっている。

(c) 済州島でこれまでに採録された別棟型民家は、最も頻度の高い3間型の主屋についてみるかぎり、2間規模の居住棟と1間規模の厨房棟を結合させたというより、同じ3間規模の非別棟型を母型として派生した可能性が高い。その逆の変化は必然的に既存の部屋数を減ずることになるので、可能性は低いものと考えられる。

(d) 厨房が主屋から分離されるようになったのは、衛生上の理由で厨房が忌避されやすかったこととともに、部屋の増設要求がおこった際の解決策として、主屋の厨房空間を転用するのが最も容易であったためと思われる。その背景には、厨房の竈とオンドルの焚き口とを別にした済州島独特のオンドルの様式がある。

現時点では、筆者は別棟型を済州島民家一般の原初的形態とみる立場はとっていないし、日本の二棟造と対比させる見方にも慎重であるべ

きと考えている。しかし、この研究を進めるにあたって、筆者自身はまだ現地調査を行っておらず、別棟型民家の分布範囲、個々の別棟型民家の建築時期や厨房分離の動機などについて確認していない。また、金鴻植が指摘したような、かつて富裕層で採用されていたという別棟形式についても、未検討である。今後、こうした課題をふまえて、本研究の補足を期したい。

(宇都宮大学国際学部)

〔注〕

- 1) 杉本尚次編『日本のすまいの源流』(文化出版局, 481頁, 1984年)においても、この形式の民家の検討が重点課題の一つになっている。
- 2) 張保雄(1984):『日韓民家の比較』前掲1), 306~317頁。
- 3) 藤島亥治郎(1925):『濟州島の建築(四)』朝鮮と建築4-9, 12頁。
- 4) 善生永助(1929):『生活状態調査(其三)濟州島』朝鮮総督府, 127~130頁。
- 5) 榊田一二(1939):『濟州島の聚落の地誌学的研究』『榊田一二地理学論文集』弘詢社, 1976年, 120~146頁所収。
- 6) 泉 靖一(1966):『濟州島』東京大学出版会。
- 7) 金正基・金鴻植(1973):『濟州島の建築(韓文)』『濟州島文化財および遺蹟綜合調査報告書』濟州道, 272頁。
- 8) 張保雄(1974):『濟州島民家の研究(韓文)』地理学, 10, 13~32頁。張保雄(1981):『韓國の民家研究』(韓文), 寶晉齋, 135~180頁所収; 張保雄著・佐々木史郎訳(1989):『韓國の民家』古今書院, 143~187頁所収。
- 9) 吳洪哲(1974):『濟州島の聚落に関する地理学的研究』(韓文), 私家版, 143頁
- 10) 金鴻植(1978):『民俗村指定保存対象地域調査報告書』(韓文), 濟州道, 259頁。
- 11) 金鴻植(1985):『濟州道地方(韓文)』『韓國民俗綜合調査報告書』第16冊(住生活篇), 韓國文化公報部・文化財管理局, 438~529頁。
- 12) 曹成基(1983):『韓國民家における「北部型」と「濟州島型」の比較(韓文)』大韓建築学会誌, 27-112, 26~31頁。
- 13) 金光彦(1988):『濟州島の家』『韓國の住居民俗誌』(韓文), 民音社, 461~468頁。
- 14) 前掲2), 314頁。
- 15) 張保雄(1985):『韓國民家と日本民家の比較研究(韓文)』『竹坡洪淳完教授華甲紀念論文集』螢雪出版社, 349~363頁。なお、張は1994年に発表した論文でも、1984年および1985年の論文と同趣旨の主張を繰り返している; 張保雄(1994):『韓・日民家の平面構造の比較研究(韓文)』大韓地理学会誌, 29-1, 3~15頁。
- 16) 野村孝文(1984):『朝鮮半島の住まい』前掲1), 289~305頁。
- 17) 前掲4), 20~21頁。最近の部屋の増設にともなう厨房の分離については、曹(1983), 野村(1984)らも指摘している。前掲12); 前掲16), 468頁および483頁。
- 18) 前掲10), 159頁。
- 19) 前掲11), 452頁。ほかに、金鴻植・朴泰洵・林在海(1991):『草家』(韓文), 悦話堂, 54頁や、金鴻植(1992):『韓國の民家』(韓文), ハングル社, 320頁, 513頁にも同様の記述がある。
- 20) 前掲15), 362頁。
- 21) 前掲8), 21頁; 前掲9), 92頁; 前掲13)
- 22) 金正基・金鴻植(1974):『住生活(韓文)』『韓國民俗綜合調査報告書』第5冊(濟州島篇), 韓國文化公報部文化財管理局, 263~284頁。
- 23) 若林弘子(1988):『濟州島草屋の建築尺度』耽羅, 1, 82~116頁。
- 24) ハウジング・スタディ・グループ(1990):『濟州島——案園の分棟住居』『韓國現代住居学』建築知識, 329~368頁。
- 25) 前掲10)。
- 26) 現在、楸子群島は行政上、濟州道北濟州郡に属しているが、歴史的には長く全羅南道に属し、文化的にも濟州島より全羅南道とのつながりが深い。同群島の民家については、申(1979)の修士論文に7例、宋(1990)の博士論文に1例の間取り図と若干の解説が掲載されているが、いずれも全羅南道の海岸島嶼地域の民家と共通した特徴を示しており、別棟型は皆無である。申東喆(1979); 南西海岸島嶼民家建築に関する研究(韓文), 韓國・弘益大学大学院建築工学科碩士論文, 132~147頁; 宋成大(1990):『韓國島嶼地方草屋

- 民家の地域性(韓文), 韓国・慶熙大学校大学院理学博士論文, 82~84頁。
- 27) 前掲11), 493頁。
- 28) 前掲8), 24~25頁。
- 29) 以下の文献に合棟化の流れを整理した図が掲載されている。佐藤基次郎(1981): 炊事用空間のカマヤとミズヤの呼称の分布, 歴史地理学, 112, 7頁; 杉本尚次(1987): 『住まいのエスノロジー』住まいの図書館出版局, 121頁。
- 30) 前掲8), 14頁。
- 31) 若林(1988)によれば, 濟州島の家屋建築では, 通常の1尺30.3cmの曲尺ではなく, 1尺51.51cmを標準とした尺度が使用されていたという。前掲23)。
- 32) 前掲8), 15頁。
- 33) 前掲8), 16頁。
- 34) 張(1974)は, この3つ石の竈が日本の沖縄地方などの様式と共通することを指摘している。前掲8), 21頁。
- 35) 前掲10), 159頁。
- 36) これに先立ち, 1920年代から30年代前半にかけて, 韓国の知識人や学生による民族意識の鼓吹をともなった農村啓蒙運動が展開され, 文字の普及や知識の大衆化・生活改善・営農改善などがうたわれた。しかし, 金鴻植があげた「新生活運動」はこれとは別で, 朝鮮総督府主導のものをさしていると思われる。なお, 1922年に旬刊誌『新生活』が創刊されているが, これは前者の啓蒙運動に属するものである。
- 37) 前掲11), 442頁。
- 38) 前掲11), 451~452頁。
- 39) 前掲8), 20~21頁。
- 40) 前掲2), 314頁。
- 41) 前掲15), 359~361頁。
- 42) 前掲7), 272頁。
- 43) 前掲8), 18~20頁。
- 44) 大韓民国の発足に先立つ1948年4月3日に起こった濟州島の大規模な武装蜂起。鎮圧の過程で住民・家屋などに多大の被害が生じた。
- 45) 濟州島の家族制度では, 子が結婚して, 同一宅地内に住む場合でも, 親とは生計を分離して別棟の副屋に住むのが原則とされる。しかし, 親が高齢に達すると次世代に家督を譲って, 副屋に移る
- こともあるので, 既存の部屋数をもてあますという事態が頻繁にあるとは思われない。前掲24), 352頁。
- 46) 前掲8), 20~21頁。
- 47) 前掲8), 19頁; 前掲12) 452頁。
- 48) 前掲8), 19~18頁; 前掲17), 295頁。
- 49) 前掲9), 82頁。
- 50) 前掲8), 20~21頁。
- 51) 前掲9), 82頁。
- 52) 韓国の住居では, 一般に儒教的な家族観を反映して, 男女や世代の別に応じた部屋の使い分けがなされてきた。主婦の居室として特化した「内房」は, 外部人士の接近や入室は慎むべきものとされ, 一般に主屋の厨房隣におかれる。しかし, 濟州島民家には, 本土民家のような内房は発達しなかったとされる。藤島玄治郎(1925): 濟州島の建築(一), 朝鮮と建築, 4-6, 17頁; 前掲8), 23頁。
- 53) 濟州島民家の間取りが複列式の房配置を含んでいることから, 朝鮮半島の北部地方にみられるような田字型の間取りに変化する流れを想定する見方もあるが, 筆者が知る限りでは, そうした実例は報告されていない。前掲3), 1頁; 金正基(1970): 韓国住居史(韓文), 『韓国文化史大系』IV(風俗・芸術史, 上), 181頁。

〔付記〕

本稿は, 1990年9月に筑波大学に提出した学位論文の一部を骨子とし, その後の補足調査によって修正・加筆したものである。本研究を進めるにあたり, 山本正三先生(現獨協大学), 奥野隆史先生, 佐々木博先生, 高橋伸夫先生, 斎藤功先生をはじめとする筑波大学地球科学系の諸先生にはご懇切なご指導を賜った。また, 韓国文化歴史地理学会の李燦先生, 全南大学校社会科学大学の張保雄先生には, 韓国民家の調査法や資料収集に多大のご指導とご支援を賜った。さらに, 耽羅研究会の梁聖宗先生と宋昌彬先生には, 濟州島の家屋と生活について, いろいろと教示いただいた。末筆ながら, 記して心より御礼申し上げたい。なお, 本研究の内容は, 1992年8月の韓国文化歴史地理学会で発表した。

A SOME REMARKS ON THE KITCHEN-DETACHED HOUSE IN CHEJU ISLAND, KOREA

Shiro SASAKI

In Cheju Island, which lies to the south of the Korean Peninsula, a unique house form which has its cooking space not in the main building but in the outbuilding can be observed. Several scholars have reported the presence of this “kitchen-detached house” especially since 1970s, and some of them have mentioned its resemblance to the similar house form of southern culture in such regions as Oceania, Southeast Asia, and the southwest islands in Japan. Detailed description, however, has not been presented about this house form and the process in which this house form developed has not been discussed sufficiently among those scholars. In this paper, the author tried to describe the form of this kitchen-detached house and to consider the validity of some points of issues in previous studies on the formation process of this house form.

Main results are summarized as follows:

(1) Many of kitchen-detached houses have their cooking space in the single huts for cooking use only or in the outbuildings combined with some other non-residential sections such as shed and stable, although there are some cases in which kitchens are laid with *ondol* rooms in the residential outbuildings.

(2) In the kitchen-detached house, the building which includes the cooking space is laid around the courtyard taking the parallel or the L-shaped arrangement with the main building in many cases, although it hardly stands behind or beside the main building. Moreover, one can hardly observe the case in which the main building and the kitchen-equipped building stand in contact or are connected with a passage. The link of positions of these two buildings is weak. In these aspects, the kitchen-detached houses in Cheju Island differ from those in Japan.

(3) As far as the example houses with 2×3 plan, which is the commonest type of floor plan in Cheju houses arranging two rooms in its depth and three rooms in its width, shown in previous studies are concerned, the kitchen-detached house seems to be derived from the kitchen-equipped house of the same sizes. It is hard to suppose the reverse process, because it becomes necessary to reduce one or two rooms then. On the contrary, one can observe some transitional variations from the preceding kitchen-detached form to the kitchen-equipped one in Japan. In this aspect also, these kitchen-detached houses in Cheju Island seem differ from those in Japan.

(4) Concerning the reason why kitchen gets detached from the main building, it seems significant to pay attention to the following fact, as well as the hygienic request that one needs to keep smoke, heat, and smell away from the residential space. Namely, it is easy to convert the kitchen space into the room space when some more rooms become necessary in the main building, because the kitchen range is separated from the *ondol* system in Cheju house.